



令和2年3月26日

令和元年度東京都立園芸高等学校経営報告〈全日制課程〉

校長 並川 直人

明治41年に創設された本校は、常に我が国の農業教育の中心的役割を担ってきた。平成30年度の創立110周年の節目を経て、平成31年度・令和元年度は111年目の時代を築き、名実ともに日本を代表する「農業の専門高校」を目指して取り組んだ。

〈目指す生徒〉

基盤学力と専門技能を身に付けた人間性・社会性豊かで、学び続ける力をもった生徒

学校経営の中期的目標と方策

(1) 学校経営

「個人商店主義」の排除、**一体的経営**を行う。

- ① 「教職員全体の経営参画意識」と「学校全体での改善」
- ② 「部分最適」よりも「全体最適」の優先、常に最適解を意識する。
- ③ 積極的な「見える化」により「情報」を学校全体で共有
- ④ 「東京で一番、定時制・全日制の仲のいい学校」、「定・全」間の見える化
⇒報告・連絡・相談の重視をはかり、「Team Engei」としての意識が高まった。
管理職への適時・適切な「報・連・相」が学校運営に活かされてきている。
「最適解」を意識して職務に当たることはまだ緒についたところとなった。
従来通りや前例主義の発想や前年の成果検証が十分に行われていない事もまだある。
令和2年度の改善課題とする。

⑤ 学校満足度

⇒学校運営連絡協議会としての学校評価では、生徒評価において「本校に入学してよかった＝89%」、「学校生活は充実していて、満足している＝88%」であり、引き続き高い結果となった。同様に保護者アンケートでは、「入学させてよかった＝92%」、「生徒は学校に行くのが楽しいようである＝88%」となり、こちらも高い水準を維持した。一方で、進路指導に関する指導や情報提供の在り方にはまだ改善の余地があり、丁寧な説明を行っている。

(2) 学習指導 (共通の基盤)

校是「勤勉 勤労」の体現と「力を付ける授業」

- ① 「言語活動の充実」 本校では、特に「**読解力**」を育成し、「**アウトプット（話す・書く・行動する）**」も重視する。
・**(定義の理解など)教科書を読んで理解できる力・表現できる力**を育成する。
- ② 「東京都オリンピック・パラリンピック教育」
オリンピック・パラリンピック教育を展開し、東京2020に向けた夢を実現する。
- ③ 「アクティブプランto2020-総合的な子供の基礎体力向上方策（第3次推進計画）」

体力向上を目指し農業系高校に相応しい体力を育成する。

⇒学習指導の場面で、「アウトプット」を意識した取り組みが増えている。生徒自身が学習（インプット）したことを表現したり、他者に伝える場面を多くすることにより、生徒の言語活動をさらに高めていく。

オリンピック・パラリンピック教育を計画的に実施した。体力向上については、体育的行事である体育祭や日ごろの保健体育の授業、農業実習等の場面で向上に努めた。生徒の体力に関する測定値は、入学前は東京都平均を下回っているが、3年生の段階では、いくつかの項目において平均値付近に向上している。まだ根拠と言えるまでの数値はないが、今後専門学習との関連について研究していく。

令和元年度の目標と取り組み結果

(1) 専門教育（多様な方向性、能力の最大化）

① 「技能スタンダード」と「アグリマイスター」

⇒技能スタンダードに位置付けている、日本農業技術検定3級の2年生全員受験 合格率84.7%（農業系高校平均60.5%、全国平均66.1%）全国の農業系高校で合格率第4位となり、日本農業技術検定協会より3級優秀団体賞を授与された。2級合格者の合格率（30%）も高く、2級優秀団体賞も授与された。（農業系高校の2級合格率16.3%、2級受験者全体の合格率は22.8%であり、本校生徒の受験者に占める合格率は高かった。）

アグリマイスター顕彰制度では、アグリマイスター・プラチナ1名、ゴールド2名、シルバー4名の計7名が認定された。アグリマイスター・プラチナ認定者は全国で100名（農業系高校生82,703名の0.12%）であり、特に優秀な学習成果を発揮した。

② 「教員個々の指導力」

⇒若手教員育成研修、指導教諭による模範授業などを活用し、教員による授業参観や研究協議会を通じて指導力・授業力の向上に努めた。また、東京都教育委員会主催研修や各校の公開授業に積極的に参加させ、自己の授業を俯瞰する機会とした。

③ 工程管理学習の充実

⇒農業科全体で「GAPする」活動に取り組み、圃場や倉庫の整理整頓、道具類のナンバリング化による数量の見える化、農薬類の一元管理化を行った。「GAPを取る」については、今年度は第3者機関の認証となる「JGAP」認証に向けて取り組み、令和2年2月に認証審査を受けた。不適合事項は無かったため認証取得の見込みとなった。

食品科では「HACCP」への取り組みが遅れていたが、学科をあげて取り組みを行った。

HACCPの考え方を取り入れた衛生管理による食品製造について、学習指導案の作成、CCP（重要管理点）や衛生管理計画や実施記録等についての整備が進んだ。また、生徒向けのHACCP啓発資料の作成と掲示により、7原則12手順についての理解を深めた。

④ 農業教育と環境教育の両立

⇒ESD（Education for Sustainable Development）=持続可能な開発のための教育、SDGs（Sustainable Development Goals）=持続可能な開発のための教育、の趣旨を生かした農業と環境の両立を図り、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育を推進するための啓発に努めた。農業教育における活動分野は幅広い、生徒の学習や活動がどの部分に関係しているのかを生徒とともに考えていく教育をさらに行っていく。

(4)生活指導（規範意識）

- ① 「挨拶ファースト運動」と生徒自身でできる「時間管理」の方法を作る。
- ② 「3つのリスペクト運動」で 互いに敬意を払い、尊敬されるよう自身を律する。
いじめ総合対策に基づいた「体罰といじめ」のない、許さない学校環境を作る。
さらに、自殺総合対策大綱に基づいた「自殺の未然防止」につなげる。

- ③ 「厳格」と「受容」（ゼロトレランス）と（カウンセリングマインド）

⇒4学級規模と農業科としての強みを生かし、生徒理解に努め、きめの細かい指導を実践した。お互いの顔が見える学校空間において、挨拶運動やリスペクト運動を展開した。体罰やいじめの認定件数は0であった。

「挨拶」の定着具合については、少し評価が分かれるところとなった。外部の方を含め、校内で出会う皆さんへの挨拶の意味を理解し、本当の意味での「挨拶ファースト」をさらに定着させたい。

- ④ 生徒の自主性・主体性の涵養

⇒「体育祭」や「園芸展」などの特別活動、「始業式」「終業式」等の儀式的行事など、あらゆる機会を捉えて、自らが取らなくては行けない行動や所作ができるように促した。

日頃から生徒が応急救護の重要性を理解し、救命講習の受講など応急救護技術の取得と向上への貢献に対して、東京消防庁玉川消防署長より感謝状を授与された。

(5)キャリア教育・進路指導（社会の変化に対応できる力を高める）

- ① 「キャリア教育マップ」の活用

⇒「キャリア教育マップ」のバージョンアップはできた。今後体系的に活用する。

- ②「教員による企業訪問・開拓」（1人最低**1社訪問**）⇒10社で実施した。

- ③ 「就職希望」に対応する。（進路決定率**100%**、**第1志望実現率90%以上**）

⇒ 就職希望者36名。全員の進路が決定した。進路決定率100%達成。

「進学希望」に対応する。（進路決定率**100%**、**第1志望実現率90%以上**）

⇒ 四年制大学22名、短期大学10名、専門学校56名、合計88名。卒業生に占める進学者の割合は65.7%であった。

(6)地域・社会貢献（社会に開かれた教育課程の先進モデル）

- ① 「地域連携リーディング校」

- ② 「専門」を生かした連携

⇒コンソーシアム会議を開催し、事業の意義や相互の関連性について理解を深めた。

年度末の全体評価のためのコンソーシアム会議は感染症対策の関係で中止した。

校内においては、1)実施目的、2)生徒の変容、3)連携先からの評価、4)次年度への課題をまとめ、総括を行った。

15年間に及ぶ三宅島での緑化活動に対して、2月に東京都教育委員会児童・生徒等表彰を受けた。また、同2月に三宅島三宅村長より徳行として緑化活動に対して表彰を受けた。

(7)教育財産・予算（質の高い教育環境を整える）

- ① 「百年の森で学ぶ、緑と食と命の学園」としての「園芸のブランド化」を推進
⇒3年間学ぶ教育環境の良さをアピールした。
- ② 校内の名所「教育財産」を整備して価値を高める。
⇒農業教育の「不易と流行」において歴史的な教育財産の整備と価値づけに取り組んだ。
校内にある百年ハナミズキの原木から接ぎ木したDNA100%同形質苗を横浜市港北区の区政
80周年記念で贈呈・植樹し、11月に横浜市港北区長より感謝状をいただいた。
- ③ 「農場管理地図」を活用して組織的な管理作業を行う。
⇒校内の整備区域について農業科で再検討した。経営企画室において樹木目録を整備した。
剪定や害虫駆除など早めの対応を行った。校舎外周の高木の剪定を行い、台風等による倒木
等のリスク低減化を図った。
- ④ 芝生管理について将来的方向性を整理する
芝刈りは委託化、総合管理は全日制と定時制の園芸科で行った。
- ⑤ 予算執行を早めに行い、落差金等を学校運営に活用する。
⇒毎月の決算見込みを確実に分析し、執行残を限りなく0に近づけた。

(8) ライフ・ワーク・バランス

- ① 「学校における働き方改革推進プラン」に基づき教職員各人のライフステージに応じた働き
方改革を工夫し、生徒の教育とやりがいのある教員生活の両立を図る。
そのためにも職務上作成した完成ファイルを共有し、知（ナレッジ）を学校の財産と
する。学校閉庁日の設定に当たり、保護者や学校外の理解・啓発を図る。
⇒今年度も企画調整会議と職員会議の一体化を図り、会議の縮減を図った。毎週の企画調
整会議で経営方針の周知や分掌・学年間の情報共有化を図った。
定時制職員で在校時間が規定時間を超える職員はいなかった。
学校閉庁日の趣旨をまず教職員が理解し、年次有給休暇の取得の促進など、メリハリの
ある仕事ができるように全校で取り組んだ。